

# 安行の植木生産業における文化的景観の 景観構造の解明

奥泉由有\*・町田彰久\*\*・荒井 歩\*\*\*†

(平成 31 年 2 月 20 日受付/令和元年 6 月 7 日受理)

**要約:** 埼玉県川口市安行は江戸時代から続く伝統的植木生産地域であり、恵まれた地形・地質と東京近郊の立地性が相まって、現在も植木生産業が続いている。本研究では、安行の植木生産地としての歴史的背景を踏まえた上で、植木畑の立地特性及び利用特性を解明し、安行の植木生産地としての文化的景観の景観構造を明らかにすることを目的とした。安行は標高 15m の台地と標高 5m の低地が入り組んだ複雑な地形を有する。調査の結果、台地の平面形状及び断面形状より区分した 5 つの地域を、景観単位として設定した。各景観単位の特徴より、安行の植木生産業における文化的景観の景観構造の特徴として、①景観構造を構成する地形は台地・低地・斜面であること、②植木畑は台地に立地し、かつ低地または台地につながる緩斜面に立地すること、③斜面には樹林が存在すること、④台地には井戸、低地の植木畑付近には水路がみられることの 4 点があげられた。

**キーワード:** 景観構造, 文化的景観, 植木生産業, 植木畑

## 1. 研究の背景と目的

埼玉県川口市安行は江戸時代から続く伝統的植木生産地域である<sup>1)</sup>。恵まれた地形・地質と東京近郊の立地性が相まって、現在も植木生産業が続いている。「農林水産業に関する文化的景観の保護に関する調査研究」(2003)では、「安行の植木」として 2 次調査の対象に選定された<sup>2)</sup>。さらに現在、川口市では植木生産地としての安行を国の重要文化的景観に選定しようとする動きがあり、調査が進められている。

近年、地域固有の歴史の中で育まれてきた多様な景観の保全が重視されている。平成 16 (2004) 年には文化財保護法改正に伴い、文化的景観が規定された。篠原 (2009) は、文化的景観を表出された景観と表現し、景観を守るためにその景観を支えている人間の営為、活動について言及する必要性を指摘している<sup>3)</sup>。よって、今後安行の植木生産業を基盤とする景観を継承していくためには、植木生産地としての安行の存続を図ることが不可欠である。そのため、安行固有の植木生産地としての価値づけが必要とされている。

これまでに、新井 (1984) は伝統的な植木生産地である安行地域が、1960 年代以降の都市化の進展、植木需要構造の変化、新興植木生産地域の成立などの経営上のインパクトに対して、どのように産地の性格を形づくってきたかについて経営の観点から検討を試みた<sup>4)</sup>。また、澤田 (1985)

は、安行の位置する埼玉県南東部地域が県内最大の植木生産地域へと発展し得たのは、販売立地の優位性に基づくところが大きいと結論づけている<sup>5)</sup>。一方、安行の植木生産業について、安行特有の地形や地質等の自然環境や、植木生産業が営まれていることにより形成されてきた文化的景観に着目した研究はない。

そこで、本研究では安行の景観について、植木生産業という生業に着目し、文化的景観の観点から研究を行う。文化的景観とは「地域の自然、歴史、文化を背景として、伝統的産業および生活と密接に関わり、その地域を代表する独特の土地利用形態又は固有の風土を表す景観」と位置付けられる。安行の植木生産地としての歴史的背景を踏まえた上で、地形的特徴や緑地分布状況に着目し、植木畑の立地特性を解明する。同時に、植木畑の空間構成や利用状況から植木畑の利用特性を解明する。最後に、安行の植木生産業を基盤とする文化的景観の景観構造を固有の地形を活かした生業に関する土地利用や空間構成の総合的な眺めの構造として明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

### (1) 植木生産地としての安行の位置づけ把握

文献<sup>1,4,6,7)</sup>及び地形図 (2 万 5 千分の 1 (H14~H24)<sup>8)</sup>) を用いて、日本の四大植木生産地の地形的特徴と植木畑の分布状況を整理し、植木生産地としての安行の特徴を明確にした。

\* 東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻

\*\* 栃木県立宇都宮白楊高等学校

\*\*\* 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

† Corresponding author (E-mail: ayumi@nodai.ac.jp)

## (2) 調査対象範囲の設定

### a) 「安行」の地理的及び歴史的解釈

文献<sup>4,5,9-15)</sup>をもとに、植木生産の場としての「安行」の地理的及び歴史的解釈を整理した。

### b) 植木生産業が行われている範囲の整理

植木生産業が行われている範囲を明らかにするために、文献<sup>16)</sup>及び昭和20年代・昭和40年代・現在(平成20年代)の地形図(2万5千分の1(S27~S33<sup>17)</sup>, S45~S48<sup>18)</sup>, H13~H21<sup>19)</sup>)を用いて、安行周辺における植木畑の分布範囲を整理した。さらに、文献<sup>20-22)</sup>より植木生産業者の町村別戸数を把握し、地形図(2万5千分の1(H13~H21)<sup>19)</sup>上に整理した。

### c) 調査対象範囲の設定

「安行」の地理的及び歴史的解釈、植木生産業が行われている範囲の整理をもとに、本研究における調査対象範囲を設定した。

## (3) 植木生産地としての歴史の把握

### a) 安行の地域形成の歴史

安行の地域の形成過程を明らかにするために、文献<sup>23-25)</sup>をもとに、関東郡代伊奈氏によって安行周辺地域の整備が行われたとされる江戸時代初期から末期までの安行周辺地域における河川改修や新田開発等の整備履歴を整理した。

### b) 安行における植木生産地形成の歴史

安行における植木生産地の形成過程を明らかにするために、文献<sup>5,26)</sup>をもとに、安行において植木生産が始まったとされる江戸時代初期から現代までの期間について、植木の生産が始まった経緯や、社会背景の変化により変動する植木需要に伴う植木生産業への影響等について整理した。また文献<sup>16,27)</sup>、Webサイト<sup>28)</sup>、地形図(2万5千分の1(H13~H21)<sup>19)</sup>)をもとに、街道筋等の植木生産地の形成に関わる環境状況について整理した。

## (4) 植木畑の立地特性の解明

### a) 地形的特徴の把握

土地分類図(埼玉県20万分の1地形分類図<sup>29)</sup>)、地形図(2万5千分の1(H13~H21)<sup>19)</sup>、川口市1:2,500(2013年)<sup>30)</sup>、さいたま市1:2,500(2016年)<sup>31)</sup>及び現地調査をもとに地形分析を行い、台地の形状、谷津や低地の分布状況、斜面の傾斜、水系等の特徴を把握した。

### b) 優占的な緑地状況及びその変遷の把握

地形による土地利用の特徴及びその変遷を把握するために、昭和20年代・昭和40年代・現在(平成20年代)の3時代について、地形図(2万5千分の1(S27~S33<sup>17)</sup>, S45~S48<sup>18)</sup>, H13~H21<sup>19)</sup>)より植木畑に加え樹林、畑、水田等も含めた緑地の状況とその変遷を整理した。

## (5) 植木畑の利用特性の解明

### a) ヒアリング対象業者の選定

安行周辺に植木畑を所有し、現在も露地での植木生産を中心に行っている植木生産業者5軒を選定し、平成30(2018)年11月27日及び同年12月17, 18日にヒアリング

表1 安行におけるヒアリング対象業者の属性

	安行地域	戸塚地域	神根地域	赤山地域	
	業者A	業者B	業者C	業者D	業者E
業態	植木生産業	植木生産業	花卉生産業	植木生産業	盆栽
創業年代	江戸時代	江戸時代	江戸時代末	昭和20年代	江戸時代前期
年代	80代	90代	80代	80代	80代
性別	男性	男性	男性	男性	男性

調査を行った。被験者は、所在地区や詳細業態に留意して選定した(表1)。

### b) 植木畑の空間構成の把握

植木畑の空間構成を把握するために、地形図(川口市1:2,500(2013年)<sup>30)</sup>、住宅地図(ゼンリン電子住宅地図デジタルタウン埼玉県川口市・蕨市(2018年)<sup>32)</sup>)及びヒアリング調査をもとに、植木畑内の地形や植木の配置及び作業道の位置等を整理し、植木畑内の平面図を作成した。

### c) 植木畑の利用状況の把握

植木畑の利用状況を把握するために、文献<sup>33-41)</sup>及びヒアリング調査をもとに、植木生産業における日々の業務内容及び長期的な生業工程を整理した。また、栽培樹種や植木の流通経路等についても整理した。

## (6) 文化的景観構造の解明

植木生産地としての歴史、植木畑の立地特性及び利用特性を踏まえ、景観単位を設定すると共に安行の文化的景観の構造を解明した。

## 3. 研究の結果

### (1) 植木生産地としての安行の位置づけ把握

日本の植木生産地は伝統的植木生産地域と新興植木生産地域に大別することができる<sup>1)</sup>。安行は伝統的植木生産地域とされ、稲沢(愛知県)、細河(大阪府)・山本(兵庫県)、久留米・田主丸(福岡県)とともに四大植木生産地として位置付けられている<sup>1)</sup>。

四大植木生産地のうち、安行以外の3地域は川沿いの低地や山の麓に立地するのに対し、安行は川沿いの低地と台地で構成された土地に立地している。川沿いの低地に加え、台地・斜面の各地形を有する地形的特徴は、安行固有のものだと考えられる。

### (2) 調査対象範囲の設定

#### a) 「安行」の地理的及び歴史的解釈

収集した資料<sup>4,5,9-15)</sup>ごとに定義された「安行」の範囲を地図上に整理したところ、主に川口市北東部を指す狭義の「安行」と、川口市北東部からさいたま市も含む範囲を指す広義の「安行」があり、「安行」の範囲の定義は2つに大別された。このことから、「安行」という地域を明確に定めた範囲設定はないことが分かった。

#### b) 植木生産業が行われている範囲の整理

昭和20年代、昭和40年代、現在(平成20年代)の植木畑の分布範囲を整理した。昭和20年代ではほとんど植木

畑の分布が確認されなかった。また、昭和40年代及び現在の植木畑の分布範囲を整理したところ、両時代共に現在の川口市北東部及びさいたま市緑区・見沼区・岩槻区の範囲に分布しており、おおよその分布範囲に変化はなかった。さらに、安行周辺を通る街道の一つである日光御成道の沿道景観について、昭和59(1984)年にはおおよそ前述の範囲において、沿道に植木畑が形成されていた<sup>16)</sup>。

次に、大正15(1926)年、昭和27(1952)年、平成26(2014)年の植木生産業者の戸数を1920年当時の町村範囲ごとに把握した(表2)<sup>20-22)</sup>。大正15年、昭和27年では両時期ともに旧安行村・旧戸塚村・旧神根村(現川口市北東部)及び旧大門村・旧野田村(現さいたま市緑区北東部)の5村がそれぞれ100戸以上であり、特に多かった。また、平成26年においては全体として生産戸数が大幅に減少しているものの、旧安行村・旧戸塚村・旧神根村の3村では引き続き他町村に比べ生産戸数が多く、10戸以上であった。

### c) 調査対象範囲の設定

大正時代にはすでに植木生産業が盛んに行われていたこ

表2 安行における植木生産業者の町村別戸数

町村名 (1920年当時)	(単位:戸)		
	大正15年 (1926年)	昭和27年 (1952年)	平成26年 (2014年)
安行村	454	307	14
戸塚村	278	240	12
大門村	160	150	5
野田村	165	120	1
鳩ヶ谷町	35	37	1
和土村	17	30	-
片柳村	15	71	1
柏崎村	12	17	-
七里村	6	23	1
春岡村	4	7	-
新和村	3	10	-
与野町	3	3	-
蕨町	2	2	-
神根村	439	410※1	14
新郷村	25		4
青木村	2		-
芝村	1		-
尾間木村	72	75※2	-
谷田村	15		-
浦和町	3		-
木崎村	2		-
三室村	2	-	
大宮町	2	26※3	-
黒浜村	-	23	-
不明	-	-	1
合計	1717	1551	54

※1:昭和27年当時に川口市だった範囲の生産戸数であり、表中に表記されていない村の範囲も含む生産戸数となっている。

※2:昭和27年当時に浦和市だった範囲の生産戸数であり、表中に表記されていない村の範囲も含む生産戸数となっている。

※3:昭和27年当時に大宮市だった範囲の生産戸数であり、表中に表記されていない村の範囲も含む生産戸数となっている。

一:生産戸数の表記なし。

とが確認され、現在も植木畑が多く存在する、旧安行村・旧戸塚村・旧神根村・旧大門村・旧野田村の範囲を、本研究における調査対象範囲として設定し、以下、安行と呼ぶこととする(図1)。なお、この範囲は前述した狭義の「安行」の範囲におおよそ一致する。

### (3) 植木生産地としての歴史の把握

#### a) 安行の地域形成の歴史

天正18(1590)年~天保14(1845)年、安行周辺を含めた武蔵国は後に関東郡代と呼ばれることになる伊奈氏によって統治されていた。伊奈氏は利根川の東遷や荒川の西遷などの治水事業や新田開発に注力し、安行周辺の地域を形成していった。特に天正18(1590)~寛文5(1665)年の忠次・忠治・忠克の時代と元禄1(1688)年~天明7(1787)年の忠篤・忠順・忠達・忠宥・忠尊の時代には、大規模な河川改修や用水路の開削及び新田開発が行われ、安行周辺の低地部分も水田として利用されるようになった。また、宝永4(1707)年の富士山の宝永大噴火や、天明3(1783)年の浅間山の大噴火の際の復旧工事等にも、伊奈氏が尽力したとされている<sup>23)</sup>。

#### b) 植木生産地形成の背景となる環境

東京から20km圏域での立地は、植木の運搬に有利な条件であった。安行周辺には、3つの街道が通っている。特に日光御成道の道筋は、安行が位置する標高15mの台地上を通過しており、植木の運搬経路として利用されていたと推察できる。また、安行周辺には綾瀬川などの水運も発達しており、肥料や人糞尿が入荷され、植木や苗木が出荷されていた<sup>27)</sup>。

#### c) 安行における植木生産地形成の歴史

安行の植木生産は、江戸時代の明暦年間(1655~1657年)に旧安行村の吉田権之丞が切り花や植木を作って江戸に売り出したのが始まりとされる<sup>26)</sup>。明治時代になると関東大震災後の東京の復興に向けた植木需要の増加等により、安行の植木生産は急速に拡大した<sup>5)</sup>。一方、第二次世界大戦中には食糧増産のため、植木畑の多くが普通畑に転換された<sup>5)</sup>。しかし、戦後の農地開放や高度経済成長の影響を受け、安行の植木生産は再度拡大に転じた<sup>5)</sup>。特に戦後の農地開放による影響は大きく、現在、安行の低地部分に分布する植木畑の多くは、農地開放により水田から転換したものとされている。

### (4) 植木畑の立地特性の解明

#### a) 地形的特徴の把握

安行は大宮台地の最南端に位置しており、標高15mの台地と標高5mの低地が入り組んだ複雑な地形となっている。地形の平面形状及び断面形状の違いにより、調査対象範囲内を安行地域・戸塚地域・神根地域・赤山地域・見沼地域の5地域に区分した(図1,表3)。台地の平面形状は、安行・見沼地域では低地に対して直線状に対峙する形状、戸塚地域では低地部分に突き出す形状、神根地域では低地を取り囲む形状となっている。さらに、地形の断面形状に関して、安行・戸塚・神根・見沼地域の斜面は勾配約15



※図中の断面位置を示すアルファベットは図2内に表示したアルファベットに対応

出典：国土地理院 数値地図25000：草加(H21)、岩槻、野田市、浦和、越谷(H18)、上尾、与野(H15)、赤羽(H13)

図1 安行周辺地形図

度前後となっており、標高差は安行・戸塚・神根地域で約10m、見沼地域で約5mであった。さらに、赤山地域の斜面は勾配約3度前後となっており、前者に比べ緩傾斜となっていることが確認された。なお、赤山地域は緩傾斜がすり鉢状に地形を形成していた。

b) 優占的な緑地状況及び変遷の把握

優占的な緑地状況の変遷を整理した(表4)。台地の緑地状況の変遷は全ての地域で同様に変化しており、昭和20年代は畑、昭和40年代は畑及び植木畑、現在は植木畑となっていた。斜面について、赤山地域を除く4地域では昭和20年代から現在まで基本的には樹林となっていた。赤山地域は昭和20年代から現在まで畑など樹林以外の分布が確認された。また、低地については地域ごとに変化が見られた。安行・戸塚・神根地域では昭和40年代以降に植木畑が見られ、赤山・見沼地域では昭和40年代までは水田のみが分布していた。さらに、かつては全ての地域の低地において水田の分布が見られたが、現在は宅地開発や畑・植木畑としての利用が進んだことにより、見沼地域を除いて水田は見られなくなった。

c) 植木畑の立地特性の解明

地形的特徴、緑地の分布状況及び住宅等の周辺の土地利

表3 安行における地形タイプの分類

地域	断面形状 (斜面の形状)	平面形状 (台地の形状)
安行地域	標高15m 急傾斜	直線
戸塚地域	標高5m 急傾斜	突き出し型
神根地域		囲み型
赤山地域	標高15m 標高10m 緩傾斜	すり鉢
見沼地域	標高10m 標高5m 急傾斜	直線

用を踏まえ、植木畑の立地特性について考察した。

急斜面を有する安行・戸塚・神根地域では、主に台地上と斜面下の低地部分に植木畑が位置しており、見沼地域では芝川沿いの低地と周辺の台地上に植木畑が位置していた。一方、赤山地域では台地と台地につながる緩斜面に植木畑が見られた。また、全ての地域において、低地の植木畑付近には河川又は水路等の水系が確認された。さらに、神根・見沼地域の低地部分は植木畑と畑が混在した状況となっていた。

(5) 植木畑の利用特性の解明

ヒアリング調査及び現地調査より得た植木畑の空間構成及び利用状況について整理し、植木畑の利用特性を考察した(表5)。

a) 地形・土質に起因する植木畑の利用特性

急斜面を有する安行・戸塚・神根地域の業者は、植木畑を台地と低地の両方に所有しており、台地と低地の植木畑の使い分けが確認された。安行地域の業者A・戸塚地域の業者Bでは、低地の植木畑にて苗木生産を行い、成長段階に応じて台地の植木畑に移植していた。一方、神根地域の業者Cでは台地の植木畑で苗木生産を行い、その後土地の水分量の違いを考慮して低地又は台地の植木畑に移植していた。

赤山地域の業者は、台地上の平坦な土地に加え、緩斜面も植木畑として利用しており、植木の成長段階や土中の水

分量及び日当たり等を考慮して、土地を使い分けるといった特性が見られた。特に、南向きや東向きの緩斜面では日当たりが良いことから、苗木や幼木が生産されていた。

また、全ての業者に共通して、植木生産において灌水や移植の際の水ぎめに利用される水の水源として、台地上の井戸を利用していた。

以上の結果より、植木畑の立地する地形による植木畑の利用特性が確認された(表6)。

b) 植木生産による植木畑の利用特性

植木生産において、施肥による土壌改良や連作障害の対策は必須であり、安行においても全ての業者で施肥や連作障害の対策が行われていた。かつて斜面林の落ち葉を肥料として利用していた神根地域の業者Cでは、植木畑付近に斜面林の存在が確認された(表6)。また、植木畑内の土の上下を入れ替える天地返しや、出荷後の植木畑で農作物や他樹種の栽培を行うなどの連作障害対策の作業に伴い、植木畑内の空間構成は変化していると考えられる。

c) 搬入路にみる植木畑の利用特性

植木畑内には作業道が通り、搬出入の利便を考慮して、

表4 安行における優先的な緑地状況の変遷

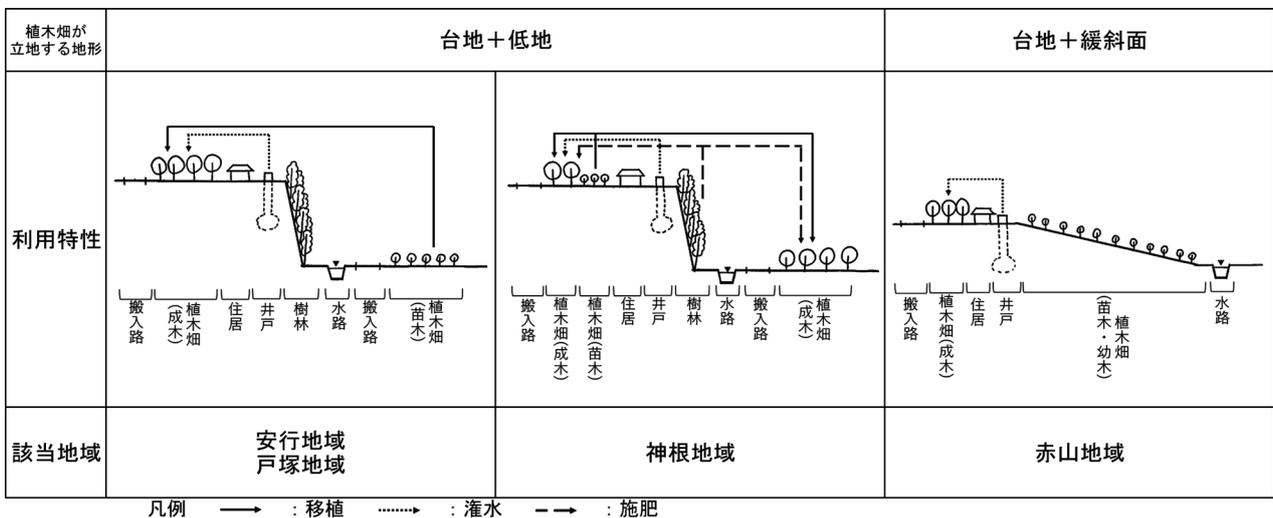
台地	斜面		低地			
	安行・戸塚	赤山	安行・戸塚	神根	赤山	見沼
全地域	安行・戸塚	赤山	安行・戸塚	神根	赤山	見沼
畑又は空地	樹林	樹林	水田	水田	水田	水田
↓	↓	↓	畑又は空	畑又は空	↓	↓
植木畑	樹林	植木畑	水田	植木畑	水田	水田
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
植木畑・空地	樹林	植木畑	水田	植木畑	↓	↓
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
植木畑	樹林	植木畑	植木畑	植木畑	荒地	植木畑
						水田
						荒地

表5 安行の植木生産業者へのヒアリング調査結果

地域		安行地域	戸塚地域	神根地域	赤山地域	
業者名		業者A	業者B	業者C	業者D	業者E
空間構成	植木畑が立地する地形	台地・低地	台地・(低地)	台地・低地	台地・緩斜面	台地・(緩斜面)
	植木畑内の地形	平坦地	平坦地	平坦地	平坦地+斜面	平坦地+(斜面)
搬入路	車道の隣接	○	○	○	○	x(○)
	作業道	○	○	○	○	○
水源	(井戸)	(井戸)	(井戸)	(井戸)	(井戸)	(井戸)
	生業工程	繁殖 ↓ 移植 ↓ 出荷	苗木の仕入れ or (繁殖) ↓ (移植) ↓ 出荷	花卉の仕入れ or (繁殖) ↓ (移植) ↓ 出荷	苗木の仕入れ ↓ 移植 ↓ 出荷	苗木の仕入れ or 繁殖 ↓ 植え替え (移植) ↓ 出荷
繁殖方法	繁殖方法	挿し木 接ぎ木	(挿し木) (接ぎ木) (取り木) (株分け) (山取り)	(挿し木) (接ぎ木) (株分け)	-	挿し木 取り木 (接ぎ木)
	移植の有無	○	(○)	(○)	○	x(○)
移植	移植の有無	○	(○)	(○)	○	x(○)
	移植場所	低地→台地 同じ敷地内	(低地→台地) 同じ敷地内	(台地→低地) 同じ敷地内	同じ敷地内	(同じ敷地内)
施肥	施肥の有無	○	(○)	○	○	○
	肥料の種類	(人糞)	-	(落ち葉) (野菜のくず) (石灰)	化成肥料	-
連作障害の対策	連作障害の対策	農作物の栽培 天地返し	-	他樹種の栽培 農作物の栽培	天地返し	天地返し

(○) : 過去の情報又は現在の情報が定かではないもの

表6 安行における植木畑の利用特性



凡例 → : 移植 ..... : 灌水 - - - : 施肥

車道に面した部分や比較的広幅員の作業道沿いでは、高木や仕立物が生産されていた。また、商品としての配列を考慮し、隣接する車道に近い部分や植木畑の入口付近には、主力商品の植木や完成品の盆栽が配置されていた。よって、植木畑の入り口の位置や隣接する車道、作業道の幅や入り方が植木畑内の配置に影響を与えていることが分かった。

d) 流通潮流にみる植木畑の利用特性

全ての業者において特定の栽培樹種はなく、その時代の流通潮流を意識して栽培樹種を決定する傾向が見られた。そのため、各業者の植木畑内には多様な樹種が見られ、時代によっても栽培樹種が変化している。

(6) 景観構造の解明

調査の結果より、5つの地形タイプによる地域区分を景観単位として設定し、各景観単位における断面構造をもとに、景観単位ごとの特徴を整理した(図2)。

急斜面を有する安行・戸塚・神根・見沼地域では、斜面に樹林、台地と低地に植木畑がみられる構造となっており、台地と低地に分布する植木畑を使い分けるといった特徴がみられた。安行・戸塚・見沼地域では低地の植木畑で苗木生産を行い、生長段階に応じて台地の植木畑に移植していた。特に、安行地域における低地の植木畑は第二次世界大戦中まで水田として利用されており、戦後の農地開放により植木畑へと転換された経緯がある。そのため、低地の植木畑の土中には水分が豊富に含まれており、挿し木に適した土地として苗木生産に利用されていると考えられる。また、戸塚地域では、現在は宅地化が進んでおり、台地の植木畑のみで生産を行っている業者もあったが、かつては低地にて苗木生産や稲作を行っていたことが確認されている。一方、神根地域では台地の植木畑で苗木生産を行い、成長段階に応じて低地又は台地の植木畑に移植していた。さらに、かつては台地上及び低地の植木畑に斜面林の落ち葉を運んで堆肥として利用していたという、植木生産と斜面林との関係性も確認された。

赤山地域では、台地に加え緩斜面も植木畑として利用するという特徴がみられ、斜面には苗木や幼木、台地には成木を配置するなど、日当たりや水の多少を考慮して台地と斜面が使い分けられていた。

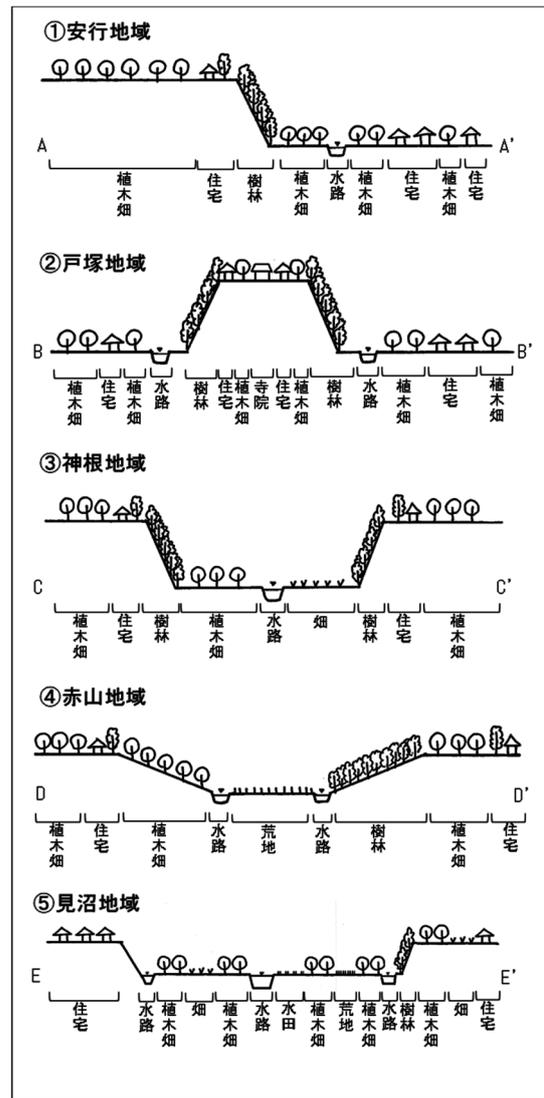
以上のような景観単位ごとの特徴より、安行の植木生産業における文化的景観の景観構造の特徴として、以下の4点があげられた。

1点目は、景観構造を構成する地形は台地・低地・斜面であった。

2点目は、植木畑は台地に立地した。かつ、低地にも植木畑が立地する地域が多く、一部は緩斜面に立地する。

3点目は、斜面には樹林が存在していた。緑地分布状況の変遷で明らかにしたように、昭和20年代から現在まで斜面には基本的に樹林が分布していた。

4点目は、台地には井戸、低地の植木畑付近には水路がみられた。また、台地の井戸は植木生産において灌水や移植の際の水ぎめに利用する水の水源として、利用されていた。



※断面図位置を示すアルファベットは図1内に表示したアルファベットに対応

図2 安行の各景観単位における断面構造

これらを踏まえると、台地・低地・斜面の各地形を有する安行では、地形に応じた植木畑の立地特性及び前述した景観単位ごとの特徴にみられるような利用特性が確認された。さらに、地形的特徴を基盤とした植木生産業が継続的に営まれていることで、台地・低地・緩斜面の各地形に分布する植木畑とともに、斜面には樹林、台地には井戸、低地の植木畑付近には水路が存在するという、安行固有の植木生産地としての景観構造が成立していた。

4. まとめ

本研究では、安行の歴史的背景を踏まえた上で、植木畑の立地特性及び利用特性を解明し、安行の植木生産業を基盤とした文化的景観の景観構造を明らかにすることを目的として研究を進めた。その結果、安行の植木生産業における景観構造は、5つの景観単位ごとの断面構造をもとに明らかにすることができた。5つの景観単位が設定されたことで、安行の文化的景観の景観構造は地域によってより多

様な固有性を有することが分かった。今後、文化的景観の景観構造にみられた安行全域での特徴とともに、各地域の固有性を生かした景観の保全・創造を進めることが望まれる。特に、緑の状況についてはさらなる詳細調査が必要と考える。安行では生業のために維持管理された植木畑の緑と、屋敷林や斜面林として活用されてきた緑という、異なる形態の緑が一体となって多様な景観を出現させている。屋敷林や斜面林の分布や利用状況と本研究で明らかにした植木畑の分布状況とを対比させることで、景観単位における各地域での緑の固有性に言及できると考える。

また、本研究において植木畑の立地特性及び利用特性を解明するにあたり、地形に加え土質の影響も大きいことが示唆された。本研究において実施したヒアリング調査の中でも、複数の業者から土質を考慮して台地・低地・斜面の各地形を使い分けているという話も聞くことができた。以上の内容を踏まえると、土質について詳細に調査を行い、地形的特徴と土質との関係性も鑑みて植木畑の立地特性及び利用特性を解明することが今後の課題としてあげられる。

#### 補注及び引用文献

- 1) 緑化研究会(1984)日本の植木生産地域. 株式会社古今書院, 東京, pp.6-29.
- 2) 文化庁文化財部記念物課監修(2005)日本の文化的景観農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書. (株)同成社, 東京.
- 3) 篠原 修(2009)時代を画す文化的景観の概念とその展開. ランドスケープ研究 73 巻 1 号 : p.2-5.
- 4) 新井鎮久(1984)埼玉県安行における植木の生産と流通. 日本の植木生産地域(緑化研究会編): pp.32-53.
- 5) 澤田裕之(1985)〈論説〉埼玉県における植木生産の地域的展開. 立正大学文学部論叢 82 : pp.35-60.
- 6) 前掲 1) pp.54-111.
- 7) 西村博行(1983)植木の生産と流通. 明文書房, 東京, pp.28-38.
- 8) 国土地理院数値地図 25000 : 一宮, 鳥栖, 久留米, 久留米西部 (H24), 清洲, 広根, 伊丹 (H20), 武田尾, 宝塚 (H17), 木津 (H16), 田主丸, 草野 (H14)
- 9) 井上元編(1990)随想集「造園家は語る」. 株式会社環境緑化新聞社, 東京, p.132.
- 10) 埼玉県(1954)特産の安行, p.2.
- 11) 埼玉県植物見本園. 安行の植木 果樹苗木・枝物切花, p.1.
- 12) 堀木浩子編著(1998)安行植木と農業ノート. けやき舎, 埼玉, p.20.
- 13) 社団法人埼玉懸山林省(1926)安行地方植木の葉. 社団法人埼玉懸山林省, 埼玉, p.2.
- 14) 川口市編(1982)川口市近代資料編Ⅱ. 川口市, 埼玉, p.337.
- 15) 農耕と園芸別冊 植木③庭木と造園技術, p.19.
- 16) 埼玉県教育委員会編(2007)歴史の道調査報告書集成 14 関東地方の歴史の道〈4〉埼玉 1. 有限会社海路書院, 東京, pp.148-172.
- 17) 国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 : 越谷, 浦和, 与野 (S27), 赤羽 (S30), 野田市, 岩槻 (S31), 草加 (S32), 上尾 (S33)
- 18) 国土地理院 2 万 5 千分 1 地形図 : 越谷, 岩槻, 上尾, 与野 (S45), 浦和 (S46), 草加, 赤羽 (S47), 野田市 (S48)
- 19) 国土地理院数値地図 25000 : 草加 (H21), 岩槻, 野田市, 浦和, 越谷 (H18), 上尾, 与野 (H15), 赤羽 (H13)
- 20) 前掲 11) p.9.
- 21) 前掲 15) pp.344-355.
- 22) 公益財団法人川口緑化センター事業課編(2014)川口市樹木等生産調査報告書. 公益財団法人川口緑化センター, 埼玉, pp.26-230.
- 23) 本間清利(1977)関東郡代. (株)埼玉新聞社, 埼玉.
- 24) 小澤正弘(2004)関東郡代伊奈氏の研究二. 小澤正弘, 埼玉.
- 25) 小澤正弘(2009)関東郡代伊奈氏の研究二. 小澤正弘, 埼玉.
- 26) 社団法人日本植木協会(1985)植木産業の歩み. 社団法人日本植木協会, 東京, pp.36-39.
- 27) 埼玉県教育委員会編(2007)歴史の道調査報告書集成 16 関東地方の歴史の道〈6〉埼玉 3. 有限会社海路書院, 東京, pp.19-38.
- 28) 有限会社 u ソリューションズ, 五街道を地理院地図で表示. 〈<http://www.u-sol.co.jp/hodogaya/kaidokml/5kaido/>〉(最終アクセス 2019 年 2 月 10 日)
- 29) 国土交通省国土政策局国土情報課, 埼玉県 20 万分の 1 地形分類図. 〈<http://nrb-www.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F2/MAP/211001.jpg>〉(最終アクセス 2018 年 12 月 28 日)
- 30) 川口市(2013)川口市地形図 1 : 2,500. No. 5, 9, 10, 15, 16.
- 31) さいたま市(2016)さいたま市地形図 1 : 2,500. No. 48, 49.
- 32) 株式会社ゼンリン(2018 年)ゼンリン電子住宅地図デジタウン埼玉県川口市・蕨市. 株式会社ゼンリン, 東京.
- 33) 中村恒雄(1976)植木全科. 家の光協会, 東京.
- 34) 上原敬二(1979)樹木の栽培と育成. 加島書店, 東京.
- 35) 船越桂市編著(2006)枝物—60 種の導入から出荷まで—. 社団法人農産旅村文化協会, 東京.
- 36) 上原敬二(1978)植木の増殖と仕立て. 加島書店, 東京.
- 37) 高柳良夫(2005)より簡単で確実にふやせる さし木つぎ木とり木. 株式会社日本文芸社, 東京.
- 38) 大山玲瓏(1974)盆栽入門. 泰文館, 東京.
- 39) 盆栽専科刊行会編(1979)盆栽専科=これが盆栽だ. 株式会社自然の友社, 東京.
- 40) 阿部定夫ほか(1998)花卉園芸学. 株式会社朝倉書店, 東京.
- 41) 澤田裕之(1996)近郊花卉園芸地域の研究. 株式会社文化書房博文社, 東京.

# Elucidation of Landscape Structures on Cultural Landscape for Garden Plant Production Industry in Angyo

By

Yu OKUIZUMI\*, Akihisa MACHIDA\*\* and Ayumi ARAI\*\*\*†

(Received February 20, 2019/Accepted June 7, 2019)

**Summary** : Angyo, Kawaguchi City, Saitama Prefecture, Japan has been a traditional garden plant production area since the Edo era. By topography and soil feature and location characteristics in the suburbs of Tokyo, garden plant production continues to the present. The purpose of this study is to clarify the landscape structure of the cultural landscape as a garden plant production place in Angyo. First, we grasped the historical background of the garden plant production place of Angyo. Next, we divided Angyo area by topographic characteristics and clarified location characteristics of the garden plant field. Then, we elucidated usage characteristics of the garden plant field from space constitution and the usage situation of the garden plant field. As a result, we confirmed that features of location and land use of the garden plant field are reflected by its topography. Furthermore, the features as cultural landscape of garden plant production place in Angyo were classified according to landscape structure and grasped as five landscape types.

**Key words** : landscape structure, cultural landscape, garden plant production industry, garden plant field

---

\* Department of Landscape Architecture, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

\*\* Utsunomiya Hakuyo Hight School

\*\*\* Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science, Tokyo University of Agriculture

† Corresponding author (E-mail : ayumi@nodai.ac.jp)